
群衆

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

群衆

【Nコード】

N0436E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

かつてのフランスアンジェ近辺のある街。そこで人々から偏見の目にさらされようと彼等の為に尽くす老人がいた。やがて街に病がはびこり。群衆心理をテーマにしました。

第一章

群衆

彼等がどうしてここにいろかという多くの者はそれを知らない。それはどうでもいいことであつた。

しかしこれだけは言えた。彼等が市民達にとって忌み嫌われる存在であるということだけはだ。アンジェ近郊にあるこの街においては異邦人である彼等はそうした存在であつた。

特に彼等が何かをしたというわけではない。それどころか老人は医者として人々を治療し養子の少年はそんな彼を慕つて養子に入つて弟子入りしたのである。しかし人々はそんな彼等を理解することなぞなく魔術師だの悪魔の使者だの言つて忌み嫌つていた。教会がこれを言つたわけではない。それどころかこの司祭であるミラボ―司祭は彼等に対して好意的でありその医術の腕を高く買つてさえた。しかしそれはあくまで彼個人の好意でしかなく民衆はそんなことは信じたりはしなかつたのだ。

「あの爺は魔術師だ！」

「いや悪魔だ！」

何かあればこう叫ぶのである。そうして手に手に物騒なものを持つて市庁や司祭のいる教会にまで押し掛ける。司祭はその度に彼等を宥め鎮めるのであつた。

「あの老人が何をしたというのだ」

「あいつは悪魔だ！」

「人を食う！」

そうした噂が実際に流れていた。

「悪魔に魂を売つたんだ！」

「何時かこの街も悪魔に！」

「では聞こう」

司祭はそんな彼等の前に立つていつも聞くのであつた。

「その証拠はあるのか」

「証拠!？」

「それは」

「ないな」

ここで厳しい声で彼等に対して言うのであった。

「そのような証拠は」

「それはそうですが」

「ですがそれは」

「証拠はないのだ」

またそう民衆達に対して言う。

「何もな。ましてや」

「今度は何でしょうか」

「市長殿もあの老人には感謝しておられるではないか」

「それは」

民衆はそれを否定しようとするがその通りであった。確かにこの街の市長もその老人には感謝の意を述べているのだ。積極的に人々の病を治してくれる彼に対して感謝こそすれ怨みに持つ筈がなかったのだ。これは為政者として当然のことであった。

「現に助かった者達もいる」

また民衆達に言った。

「そうではないのか？」

「それはそうですが」

「ですが」

確かにそうした者達もいて実際に老人に対して感謝して尊敬している。しかしそれはあくまで一部でしかなく街の殆どの者は老人を異邦人であるが故に恐れ憎みそうして偏見に満ちた目で彼を見ていたのである。これを僅かな者達が止めることは不可能であり司祭にしろ神の教えを後ろにしてかろうじて彼等を押し留めているのが現実であつたのだ。

そうした状況であつた。老人が助ける者達も確かに増えていつて

いるがそれ以上に彼を憎む者達が増える方が遙かに多かった。それが現実であつたのだ。

「あの御老人は悪しき方ではない」

言い聞かせるような言葉であつた。

「それをわかるのだ。いいな」

「ですがまさか」

それでも民衆達は納得しない。それで司祭に対して問うのであつた。

「それもまた悪魔の隠れ蓑であれば」

「そうだよな」

誰かのこの何気ない言葉が民衆の不安をさらに煽り立てるのであつた。

「若しそうだったら」

「俺達はいざつて時に」

「いい加減にするのだつ」

何とか荒わげないようにしたがそれでも限度がある。司祭の言葉は強いものになっていた。

「そうして疑うのは神の御教えなのか」

「それはその」

「それは」

「そうだな」

今回も何とか彼等を止めることができた。止めてからまた言うのであつた。

「人を疑つてかかればきりがない」

「ええ」

「確かに」

「だからだ。疑うのは止めにするのだ」

穏やかな声に戻つてこつ彼等に告げた。

「わかつたな。それでは今は」

「今は」

「帰るのだ」

彼等に対して帰るように促すのであった。

「いいな。そうして気を鎮めるのだ」

「わかりました」

「今は。それじゃあ」

彼等はまだ慚然としていたが司祭の言葉を聞かないわけにはいかなかった。司祭もそれをわかっていて彼等に言ったのである。彼としてはあまり好きではない方法であったがそれでも今は使われないわけにはいかなかった。老人を護る為にである。

民衆が去っていく。司祭はそれを見ながら溜息をつく。それは一度や二度ではなかったのである。過去に何度もあったことなのだ。「全く」

言葉にも溜息がこもっている。

「こんなことが何時まで続くのだ」

そう思いながらある場所に向かう。そこは老人と彼の養子であり弟子でもある少年がいる家だ。質素で何の派手さもない貧しい一軒家である。二人はそこに静かに住んでいるのである。

家の前まで来ると扉をノックする。そして家の中に声をかけた。

「司祭様ですか？」

「はい」

司祭は家の中の声に対して答えた。

「私です」

「はい。どうぞ」

穏やかな声であった。その声と共に扉を開ける。家の中から白く長い髭を持っている老人と優しい顔を持つ少年が出て来たのであった。

「ようこそおいで下さいました」

「さあ、どうぞ」

二人はその穏やかな笑顔で彼を出迎えて家の中に導き入れる。家の中も実に質素で最低限の家具の他は何もない。司祭を粗末な椅子

に座らせ水を出したのであった。

「生憎ですが」

老人は水を出したところで司祭に対して申し訳なさそうに言ってきた。

「ワインもビールもありませんので」

「いえ、それは」

司祭もまた穏やかな笑顔になっていた。その笑顔で老人に対して答える。

第二章

「構いません。水には水の味があります」

「そうですか」

「私は水が好きでして」

「こうも言うのであつた。」

「それを頂きたいと思います」

「水には水の味がある、ですか」

「そうです」

「また答えるのであつた。」

「ですから。それを有り難く頂きます」

「味気ないとは思いますが」

「しかし老人はまだこう言うのであつた。」

「この水は」

「またそれはどうして」

「一度湯にしてあるのです」

「湯にですか」

「そうです。どうも東の方では一旦水をそうしてから飲んでいようなのです」

「彼はそれを知っているのであつた。」

「その方が水にあたらなからと」

「ふむ、初耳ですな」

「いえ、本当かどうかわかりませんが」

「一応はそう前置きはする。」

「ですが。実際にそうすれば井戸にいる虫を気にしなくて飲めますし」

「そうですね。それを考えれば確かに綺麗です」

「綺麗にするのに限ります」

「それが医者としての彼の考えであつた。」

「その方が病になりませんので」

「左様ですか。いや、全く」

そこまで聞いてあらためて老人に対して感心するのであった。

「素晴らしい。そこまで学んでおられるとは」

「有り難うございます。そう言つて頂けると」

やはり彼も嬉しいようであつた。それが顔にも出ていた。善良そのものの笑みでありとても悪そうには見えない。それが彼の本当の心であつた。

「私も有り難いです」

「しかし」

司祭はここで彼に対して言うのであつた。穏やかな顔を深刻なものにさせて。

「何時までこの街におられるのですか？」

「何時までとは」

「この街は貴方にとってあまりにも危険です」

その深刻な顔で彼に対して言う。

「街の人々は偏見から貴方を魔術師だの悪魔の使いだの決めてかかつています。このままでは」

「そんなことは構いません」

司祭の言葉を受けても老人は言葉を変えないのであつた。その穏やかな笑みで彼に対して答えてきたのであつた。

「私にとつては」

「何故ですか！？」

思わず顔を顰めさせて老人に問うた。

「このままでは何時か」

「私は。確かに暖かい言葉が好きです」

それが嫌いな者なぞいない。やはり誰でも暖かい言葉が好きなのだ。それは何故かという人は暖かい中で生まれそれを愛するのが習性だからだ。

「ですが」

「ですが？」

「それでも。私は」

彼は言う。

「この街を見て思ったのです」

「この街をですか」

「最初にこの街に来た時に私は言葉を失いました」

穏やかな笑みが消え真剣で尚且つ寂しい顔になっていた。深い悲しみの顔であった。

「病に侵され為す術もなく死んでいく人々。親の手の中で死んでいく子供達」

欧州では衛生観念の欠如を主な理由として多くの疫病が流行った歴史がある。とりわけペストでは人口の三分の一が死んだとさえ言われているのだ。

「それを見て私は思ったのです。彼等を救わねばと」

「それですか」

「そうです」

それこそが彼がここにいる理由であつたのだ。

「ですから。私はここにいます」

「ですが」

しかし司祭はその老人に対してまた言うのだった。言わずにはいられなかった。

「その街の人々は貴方を嫌い憎んでいます。現に今までも」

「ええ」

何があつたのかは他ならぬ彼が最もよくわかっていることであつた。表情を消して頷いてきたのであつた。

「わかっています」

「石を投げられるのはいつものことで」

それが普通であつた。

「武器を手に襲い掛かられたことも何度もありましたな。今にしろ」
「またあつたのですか」

「はい、そうです」

正直に先にあつたことを述べた。

「一刻も早くこの街を去られることをお勧めします。パリならば教養のある貴族も多く」

「しかしです」

だが老人はここでまた言うのであつた。

「しかし？」

「そうです。この街には今も疫病があります」

「ええ」

その通りであつた。この街もまた甚だ汚く疫病がある。それを広めているのがこの老人であると言われているのだ。真相は殆どの者が知ろうともせずだ。

第三章

「ですから。それをなくすまでは」

「去らないと仰るのですか」

「そのつもりです」

穩やかだが固い決意がそこにはあった。

「どうか。それを御聞き下さい」

「あまり。お勧めはできません」

司祭は首を横に振ってこう答えた。

「このままでは貴方は」

「そうですね。ですが私は」

「何があっても。宜しいのですか？」

「元より覚悟のうえです」

また穩やかな笑みを見せて司祭に答えてみせてきた。

「私が正しいかどうかは。神が御存知ですので」

「そうですね」

「司祭様」

ここで今まで黙っていた少年が司祭に言ってきた。やはりその顔は穩やかで目の光も澄んだものであった。

「先生は本物です」

「本物なのかい」

「はい、そうですね」

その曇りのないはつきりとした声で司祭にも答えるのであった。

「これ程素晴らしい方は他におられません」

「それはそうですね」

これは司祭も認めるところだ。はつきりとその言葉に頷くことができた。

「だからだ。私も今こうしてお邪魔させてもらっているのだよ」

「有り難うございます」

「しかし。だからこそ言うのだ」

また司祭の顔が真剣なものになった。切実な声で老人に対して言うのである。

「貴方は。一刻も早くこの街を離れるべきです」

「どうしてもですか」

「そう、本当にそうするべきです」

あくまでそう勧める。それもこれも彼のことを本当に思っているからこそである。司祭は老人のことを心から心配しているのである。

「馬車でも何でも私が用意しておくから」

「非常に嬉しい御言葉です。ですが」

「それでも。駄目なのですか」

「はい。私もまた考えがありますので」

やはりこう言って受けようとはしないのであった。

「お許し下さい」

「例え何があってもですか」

「ですから。それもまた覚悟のうえですので」

彼の考えはどうしても変わらないようであった。穏やかな顔の中には確かな決意さえあるのであった。揺るぎない決意が。

「申し訳ありません」

「そうですか」

司祭はその言葉を受けて目を閉じた。それから静かに述べるのであった。

「わかりました。それでは」

「はい」

「御自身の道を歩まれて下さい」

こう言うしかなかった。

「貴方の思われるように。それが道なのですから」

「すいません、それでは」

「まさか。貴方の様な方がおられるとは」

司祭はそのことに感激さえしていた。神に仕える者であってもそ

の心は穢れきり、蓄財や権勢、美女を追い求める輩ばかりであったからである。この時代の教会の腐敗は目を覆わんばかりであった。司祭もそのことは実によく知っていたのである。教会にいるからこそ。

「ですから。身边には御気をつけ下さい」

「はい」

「僕も先生を御護りします」

少年も言ってきた。

「何があつても」

「頼む。君がいてくれるだけで非常に有り難い」

司祭は彼にも声をかけるのであった。

「だから。本当に頼むよ」

「わかりました」

彼等の誓いはささやかであつたがしっかりとしたものであつた。

そのしっかりとした誓いはそのまま彼等の胸に残つた。それから暫くはこれといって騒ぎもなく老人達も静かに暮らしていた。だがある日街に大雨が降つた。

「珍しいな」

司祭は教会の窓からその激しい雨を見て呟いていた。

「ここまで激しい雨が降るとはな」

「最近あまり降っていませんでしたし」

彼の助手を務める若い修道僧が彼に言ってきた。

「それを考えるとこれは恵みの雨ではないでしょうか」

「恵みのか」

「はい、かつてマナを降らせ給うたように」

ここで聖書の言葉が出た。

「この雨もまた」

「そうだな」

司祭はその若い助手の言葉を受けて微笑むのであった。
「水がなければ作物も育たぬし」

「我々の飲む水もありません」

「それを考えれば恵みだな、確かに」

「これこそ神の御業です」

こつとも言つのであつた。

「ですから。素直に喜びましょう」

「わかつた。では今日は静かに聖書を読むとするか」

「ええ。それでは」

修道僧は司祭の言葉を受けて微笑んできた。

「そのように」

「うむ。それではな」

彼等は静かに雨の中を過ごしていた。やがて雨も止みまた太陽が顔を出すようになった。するとここで異変が起こるのであつた。

疫病がさらに広まつたのだ。まさに街全体に。倒れ伏しそのまま事切れる者が次々に現われ街は地獄絵図となつた。老人はすぐに少年を連れて彼等の治療にあたつたがここでまたおかしい噂が何処から出て来たのであつた。

「あの爺のせいだ！」

「あいつが疫病を流行らせたんだ！」

そう言い出す者達が出て来ていたのだ。

「俺は見たんだ！あいつが井戸に毒を流すのを！」

「何っ！？」

井戸に毒を流したという噂に多くの者が反応した。

「雨の日にあいつが一人外に出て！毒を入れていたんだ！」

「それは本当か！？」

「ああ、本当だ！」

噂話の常で根拠なくこう言われるのであつた。

「井戸だけじゃない！川だつて！」

「川にもか！」

「俺達だけじゃなくて農作物にも何かしようとしていたんだ！俺は見たんだ！」

「おい、それだと大変だぞ！」

「そうだ！」

話はさらに大きくなってきていた。まるで燎原の炎の如く。

「あの爺はやっぱり魔術師だったんだ！」

「悪魔だったんだ！」

こういうことになってしまった。

「殺せ！殺すんだ！」

「さもないと俺達が！」

話がまたこうした流れになってしまった。司祭はそれを聞いて慌てて老人の家に向かう。家にいるのは彼だけで少年の姿は見当たらなかった。

第四章

「彼は」

司祭は息を切らしながら家の中を見回して少年を探す。しかし彼の姿は何処にもない。

「事は一刻を争うというのに」

「隣の街に薬を買いに行かせました」

「薬をですか」

「戻るのは後です」

「わかりました。隣街ですね」

司祭はその言葉を聞いて頷いた。それからすぐに老人に顔を向けて言う。

「すぐに。お逃げ下さい」

「この街からですか」

「そうです。もう誰にも止められません」

彼はそう老人に告げた。

「騒ぎを抑えることは。ですから」

「ですからそれは」

しかしここでも彼は司祭の言葉を受けようとはしないのであった。

「できないのです」

「今もですか」

「そうです。これもまた運命です」

彼は今この事態に陥っても穏やかな声のままであった。その顔もまた。

「ならばそれを受けるだけです」

「受けてそのまま殺されようともですか」

「はい」

また司祭に答えた。

「そうです。それだけです」

「もう馬車も用意してあるというのに」

「馬車は。いいません」

それもまた断るのであった。静かに。

「返して下さい」

「そうですか。では先生」

「ええ」

また司祭の言葉に応えてきた。

「このままここに留まるのですね」

「そうです。ですが彼にお伝え下さい」

あの少年のことであつた。

「何をでしょうか」

「これから何があるうと」

老人は司祭に伝言を述べはじめた。

「人を助けていつて欲しいと。それを」

「それを伝えて欲しいのですね」

「ええ。それに」

さらに言葉は続いた。

「誰も怨まないようにと」

「怨みを捨てよと」

「そうです。怨みは何も生み出しません」

それがよくわかつている言葉であつた。老人は賢者であつた。だがその賢者が今いわれのない偏見によつて。司祭はそれが無念でならなかつた。だからこそ今こうしてロウ神野伝言を聞いていた。それを一人残される少年に伝える為にであつた。彼も覚悟を決めていたのだ。

「だから。それは持たないようにと」

「わかりました。それではそれもまた」

「それでいいです」

老人はここまで話し終えると言葉を止めるのであつた。

「私は。これさえ伝えて頂ければ」

「思い残すことはありませんか」

「はい。何も」

ここでも静かに答えた。既に遠くから猛り狂った声が聞こえてくる。

「あそこにまだいるぞ！」

「殺せ！」

「遂に。来ました」

司祭はその声の方に顔を向けて言った。

「彼等が」

「では司祭様」

老人は司祭に対して告げた。

「これでお別れですね」

「ええ。残念ですが」

「それもまた運命です。では裏口から」

「はい。では彼には」

「お伝え下さい」

これが老人が司祭に最後に話した言葉であつた。司祭が家を出るとすぐに扉が閉まる音がした。もうそれからは何の音もしない。ただ怒り狂った群衆の言葉が聞こえるだけであつた。司祭はその彼等のところに向かう。既に無理だとわかっていても。それでも。

「止めるのだ！」

「無理だ！」

彼等はもう司祭の言葉を全く聞こうとしない。

「あいつのせいでまた多くの人が死んだんだ！」

「今度こそ！殺してやる！」

めいめいその手に斧や鎌、鋤を持っている。普通に彼等の家にある農具が武器になっていた。禍々しい光を放つて上に向けられていた。

「そうして！これで！」

「悪魔がいなくなるんだ！」

「悪魔か」

司祭はその彼等の顔と声を見て気付いた。老人を悪魔だと罵る彼等の顔こそが。最早完全に悪魔のそれになっていたのだった。彼等は気付いていなかったが。

「それはここにいる」

「そうだ！ここにいる！」

司祭の言葉も正常には聞けなくなっていた。

「あそこに！だから！」

「火はあるぞ！」

誰かが叫んだ。

「悪魔を焼き殺す日が！」

「ああ、そうだ！」

それを聞いてまた誰かが叫ぶ。

「焼き殺せ！」

「骨一本残さずにだ！」

司祭は既に後ろから押さえられている。それで動けないようにされていた。

第五章

「司祭様はこちらへ」

「どうか悪魔を倒すのを見ておいて下さい」

「そなた達はわかっていないのだ」

彼は俯いてその彼等に言うのだった。

「何処に悪魔がいるのか。全く」

「ですから悪魔はあそこにいます」

「そうです」

老人の家を指差しての言葉であった。

「今からその悪魔も炎で」

「焼き尽くされます」

「本当の悪魔の姿は近くにある」

司祭はそれでもこう呟くのであった。

「だがそれに気付く者は。いない」

「さあ、いよいよだ！」

「火が点いたぞ！」

遂に老人の家に火が点けられた。

「これで悪魔も終わりだ！」

「疫病も終わる！」

醜い、憎悪に満ちた顔での叫びがなおも続く。

「不幸はこれで消えるんだ！」

「俺達の手で！」

「いや、終わらない」

司祭はまた呟いた。

「それどころか。これから」

その彼の目の前で家が燃えていく。瞬く間に紅蓮の炎に包まれ全てが赤の中に消えていく。家のシルエツトが深く出ているがそれもそれだけであった。バチバチと音を立てているそれは死そのもので

あつた。憎悪の炎により燃えているのであつた。

次の日。少年が街に帰つて来た。司祭はその彼に老人の伝言を伝えるのであつた。

「人の為にですか」

「そうだ」

司祭はまた彼に告げた。

「そう言つておられた」

「そして人を怨むなと」

「怨みは何も残しはしない」

その言葉も告げる。

「そうも言つておられた。私にそれを伝えて欲しいと」

「わかりました」

少年は話を聞く間じつと正面を見据えていた。そこには完全に焼け落ち廃墟となつた家があつた。もうそこには誰もいなかった。

「その言葉。ずっと憶えておきます」

「そうか。それがいい」

司祭は少年が頷いたのを見て静かに微笑んだ。

「そうしてくればあの方も喜んでくれるよ」

「先生は立派な人でした」

泣いてはいない。だが声が泣いていた。

「ですから。僕も」

「それでこれからどうするんだい？」

司祭はあらためて少年に尋ねた。

「先生はおられなくなつたけれど」

「他の街に行きます」

少年はこう答えた。

「他の街で。人達を助けたいです」

「やはり。この街にはいられないか」

わかつていたが。それを言わずにはいらなかった。

「仕方ないな、それは」

「けれどそれはこの街の人達を怨んでではないです」
少年はそれは否定した。

「ただ」

「ただ？」

「この街にいたらあまりに悲しいので」

それが少年の答えであつた。

「悲しいのかい」

「先生のことを思い出しますから」

やはり泣かない。しかし声は泣き続けていた。彼の心が。

「だから。もう」

「そうか。では頑張るのだよ」

司祭はその彼に優しい言葉をかける。せめて言葉だけでも考えるの氣遣いであつた。

「何処へ行つても」

「はい。ではこれで」

そこまで言うともう立ち去ろうとした。

「さようなら」

「あつ、待つてくれ」

だが司祭はその彼を呼び止めた。そうして彼に金を渡そうとする。

「少しだが。旅の金に使つてくれ」

「司祭様……」

「よかつたらだ。私からのせめてもの気持ちだと思つてくれ」

そう言つて彼に渡すのだった。彼の心を。

「それでいいね」

「宜しいですね？」

「うん、いい」

はつきりと告げた。

「私の気持ちだから」

「わかりました。御気持ちでしたら」

彼も受け取るのであつた。これは司祭が完全に好意で言っている

とわかつているからである。そうでなければ受け取らないつもりであつたのだ。

その金を受け取った。そのうえでまた言う。

「有り難うございました」

「では元気でね」

「はい、司祭様も」

「私はこの街に残るよ」

「そうなのです」

「これからどうなるかわからないが」

街を見回す。街は機能のことが嘘のように静まり返っている。彼はそのことを内心悲しく思っていたのだがそれは口には出さずにまた少年に言うのであつた。

「そうさせてもらうよ」

「わかりました。それではまた」

「機会があればまた会おう」

「はい」

こうして少年は街を後にした。その後彼が何処に行ったのかは誰も知らない。噂ではパリに行きそこで多くの人達を助けたという。司祭はそれを聞いて嬉しく思っていた。誰もいなくなり疫病に喘ぐ街の中にあつて。そのことにせめての慰めを見出していたのであつた。

群衆 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0436e/>

群衆

2010年10月8日15時59分発行